

旭川文学資料友の会 友の会通信

第 9 号

旭川文学資料友の会
旭川市常磐公園
旭川市常磐館内
tel :0166-22-3310(228)

平成二十三年度・北海道新聞社

「北のみらい奨励賞」を受賞

この賞は、地域活性化や環境保護、社会事業などの活動を支援するため、北海道新聞社が創刊六十周年の二〇〇二年に創設。今回で十回目となり四団体が選ばれた。

「北のみらい奨励賞」を受賞して

事務局長 十河 宣洋

私たちがボランティアで運営している（NPO 法人旭川文学資料友の会）が「北のみらい奨励賞」を受賞しました。十月に伝達式があり、ボランティアや関係の方々には報告しました。

この賞を戴いたことは非常にうれしい。この賞は、地域活性化や環境保護、社会事業などの活動を支援するために北海道新聞社が行っているものだから、私たちの活動が少しでも認められたということになり、これからの活動に大いに励みになります。

十年前に、旭川ゆかりの文学関係の資料が散逸してしまうのではないかとという危機感から始まった活動ですが、市の援助と共に、ボランティアの方々の地味な活動が支えて来ました。また、会員の会費で運営費の大半を賄うため

には、市民の理解と協力が必要でした。

現在会員は約二百名。旭川にお住まいの方だけでなく、旭川近郊や道内、道外にも会員が多数増えてまいりました。寄贈された資料は、四万八千点余りになります。そのほとんどがデータベースに入力済みです。現在、まだ寄贈されるものが多いのですが、収納するスペースが不足している現状です。

現在の常磐館（旧青少年科学館）に移ってから、文学資料館を開設し多数の資料を公開しています。常磐公園の中という地の利がありながら、まだ一般に認知されていない面もありますが、入場者はかなりの数にのぼっています。

二十三年は、

木野工展を始め、旭川俳句連盟六十年の歩み展、教科書・ノート展などの展示会などを行いました。現在は旭川冬まつり・冬の風景展を開催しています。



三塚支社長から賞状を受け取る 相川会長（左から3人目） 「北海道新聞」掲載（2011年10月22日）

小熊秀雄賞に関しては、第一回からの資料が展示保存されていて、そのコーナーも充実しています。

友の会設立十周年の年に頂いた北のみらい奨励賞の精神を大切にしながら、更なる充実を目指していききたいと思えます。

この受賞を機に、市民と文学をつなぐ絆として今後より一層努力したいと考えています。

第十四回旭川文学資料展

「旭川で生まれ育った本格的作家、新聞人
木野工展」好評裡に終了

好評裡に終わった木野工展。平成二十三年五月十日～八月三十一日の開催期間中、木野工の親族や関係者の方々が数多く来館いただきました。東京から来館くださった長女の歩さんに寄稿いただきました。

父・木野工の好きだった物・事

菰口 歩

父の好きだった物・事・・・珈琲・煙草・鮭でお茶漬け・新聞・本・万年筆・麻雀・赤色。場所・・・旭川・銀座・喫茶店。そして家族・兄弟・仲間・・・怒った記憶がない優しい父でした。兄が高校生の時、離れて暮らしていたので、手紙で受験の事等心配して細かく書いて送っていました。今その時の手紙を読むと結構「教育パパ」だったのかもしれませんが。私と妹の進学の事は、何も言いませんでした。男と女は違うという古い考えだったのかもしれませんが。私は新しい服が欲しい時、母に頼むと渋るので、父の会社のある銀座まで行って買ってもらったりしていました。父が好きで通っていた「銀座清月堂」に帰り寄り珈琲を飲ませてもらった時、ちよっと大人になった気分がしたのを覚えています。兄もよく友達と一緒に珈琲を飲ませてもらう文学の話をしたそうです。私と妹とは、多分一度も文学については話さなかったと思います。妹は末っ子なので、「心（妹の名前）は、こ

のケーキの中で、どれが食べたいのか？」といつも一番先に聞いてました。小さい時は、父の布団にもぐったり背中に乗って父の身体をほぐしたりと、どちらかというと言やかしていたという感じでしたね。

私達が小さい時は母がいつも「お父さんは仕事で疲れているから起こさないでね」と言うので、私達が学校へ行く時は、まだ寝ているし、寝るまでには帰ってこないし、あまり話す時間がありませんでした。実は父の帰りの遅いのは、麻雀の事が多かった様です。



木野工 1971 年

でも大学生位になると、私達も夜遅くまで起きていたので、父が帰宅し、それからおしゃべりが始まり、普通のお父さんよりいっぱい話が出来たんじゃないかしら・・・と思っっています。父はいつも「いろんなものを観たり聞いたりした方がいいよ」と言い、芝居や音楽会に連れて行ってくれました。お金は、なかったと思えますが「本とレコードは欲しいのがあったら買っていいよ」と言ってくれましたが、私と妹は、あまり本に興味をもたなかったたので、父をがっかりさせたかもしれない。父は、あの時代の男の人には珍しく母にも優しく、誕生日や結婚記念日には、必ずプレゼントを渡していました。母は『花より団子』で違う物が欲しかった様ですが・・・私は、そんな父を素敵だと思っっていました。晩年、口数も少なくなり、時々しか声を発さなくなっていたのに、私が、まっ赤なバッグを持

って実家に遊びに行く、「そのバックいいな！」と言ってくれました。好きな色は、ずっと頭の中にあるんだーと嬉しかったです。今でも父の事を思い出すと、兄夫婦がプレゼントしてくれた赤いカップで珈琲を飲みながらショートホープ(煙草)を吸っている姿が浮かんできます。

平成二十三年九月六日十月二十九日開催 「旭川俳句連盟六十年の歩み展」を終えて

旭川俳句連盟設立六十年を記念しての企画展。旭川で活動している各俳句結社の現状が分かる展示や講演を行い、俳句関係の方々はじめ多くの市民に観覧いただきました。

旭川俳句連盟六十年の歩み展

旭川俳句連盟会長 岡 荘司

ものの芽の雪降るときも旺んなり 凍魚
昭和二十七年、「旭川俳句連盟」設立に尽力した伊藤凍魚の作品

昨年九月六日〜十月二十九日の二カ月間。「旭川文学資料友の会」の方々のご尽力と、「旭川俳句連盟」の理事・幹事・会員の皆様方のご協力を頂き、すばらしい「六十年記念展」を実施できたことに深く感謝申し上げます。

参加結社は、「旭川花樺社・旭川白魚火会・石狩会・舷燈俳句会・源流俳句会・樹氷俳句会・青女俳句会・ホトトギス丘俳句会・雪華俳句会」の九結社。それぞれの結社に所属し俳句作

りに精進している約二百名が参加。(旭川万葉俳句会は主宰逝去のため不参加)

展示品は、短冊百十八句、色紙五十五句、年譜(結社沿革史)九点、写真五十五点、句集百五十一冊、句誌百六十冊、アルバム、ファイル、衝立、トロフィー、盾など。各結社の歴史と思いがたくさん詰まった展示ばかり。



「俳句連盟」としては、内容的に画期的な企画と感じられました。準備期間の少ない中で、会員の皆様方のエネルギーに脱帽という感じですね。

展示の中に、「連盟」発足時の理事や先達の色紙・短冊も多く、各結社でこれからも大切に保管してほしい資料もありましたので、今後とも保存をお願いしたいものです。

展示期間中、各理事に、俳句に関する講演を頂きましたことにも深く感謝申し上げます。九月十七日は、北見弟花氏・大塚信太氏。十月八日は、坂本タカ女氏・石川北辺子氏・西川良子氏。同二十三日は、舘川京二氏・奥山博氏・岡荘司。

八氏の講演内容は、作句経験を踏まえた内容の濃いものばかりでした。

〈講演の概要〉

- ・ 俳句作りを始めた動機
- ・ 師から教えられたこと

- ・ 作句の苦勞
- ・ 魅了された作品
- ・ 俳句を通して学習したこと
- ・ 他結社との交流により、自分の素質を磨いたこと
- ・ 先輩に教えられたことを、どのように作品向上に結びつけたか。
- ・ 作品作りで、大切にしていること
- ・ 郷土(風土)のすばらしさを礎に俳句をどのように組み立てるか。
- ・ 俳句作りを通して生活全般に潤いが出てくるなど、良さも多いものである。
- ・ 俳句作りの柱は、人間愛と自然愛
- ・ 俳句以外のジャンルの人との出会いも大切に。
- ・ 一生で、是非残したい一句を作りたい。
- ・ 俳誌主宰の力量が会員作品の向上に結びつく。
- ・ 作者は、良い作品と出会い、そのすばらしさに感動できる心を大切に。
- ・ 多くを作句し、大胆に自作を切り捨てることを心掛けている。
- ・ 兼題、席題を大切に。
- ・ 作句は足で作ることが肝要。
- ・ 〈今後の抱負など〉
- ・ 展示は、三年後または五年後。(会員の高齢化を考慮)
- ・ 各結社が心掛けること―計画的な、資料の蓄積、保存管理。
- ・ 展示資料の一覧表作りに努めること。
- ・ 企画展の啓蒙方法の工夫。
- ・ 展示方法の工夫。

平成二十三年十一月八日〜十二月十五日開催
「旭川詩人クラブ三十五年の歩み」
第二十五回詩画展」を終えて

昭和五十二年設立の旭川詩人クラブ三十五年の歩みと毎年開催してきた詩画展をあわせて展示紹介。期間中、講話と詩の朗読などもありました。

企画展を顧みて

旭川詩人クラブ事務局長 森内 伝

このたびの「旭川詩人クラブ三十五年の歩み第二十五回詩画展」は旭川文学資料館主催、旭川詩人クラブ共催により常磐館第二展示室で開催されました。十月二十九日より詩画展の搬入開始、十一月一日から「三十五年の歩み展」の準備をし、四日には主な部分をほぼ完成させ、十一月八日より十二月十五日まで開催されました。展示には「第一回旭川詩画展」から「詩の旅」「ポエムコンサート」「土別の道北文化集会」ほかに「井上靖、今野大力の作品朗読会」など懐かしい記事や写真なども展示、故人では小池栄寿「花」、鈴木政輝「洞窟」、下村保太郎「コーヒーマイル」、各氏の詩画三点なども加えました。詩集では鈴木政輝氏の『帝国情緒』(一九三七年十月(昭和十二年))、下村保太郎氏の木版歌集『ひなげし』、木版詩集『晩愁詩抄』など展示しました。アンソロジー『旭川詩集』は創刊号より終刊の二十集まで展示、その後に創刊された『詩める旭川』は現在九集までのものを展示、会員

の生原稿なども添えました。またガリ版刷りの会報、詩画展のパンフレットなど思い出のものも展示しました。また十一月二十六日は、午後一時三十分より「講話と詩の朗読会」を、常磐館中二階キッズルームで行いました。司会立岩恵子さん、旭川詩人クラブ会長富田正一さん挨拶のあと、山口敬子さんによる講師紹介があり、第四回小熊秀雄賞受賞、旭川文化功労賞受賞者の佐藤比左良氏の講演「―ガリ版とともに半世紀―」は、戦後まだ自由にももの言えないガリ版時代の貴重な体験、自作の詩の朗読など心に残るお話がありました。「詩と遊ぼう!」は、東延江さんが担当され、参加者五、六名がグループとなり、題名は「旭橋」「一組」「大雪山」「雪」「雲」が一組となり、一人一行の詩がスムーズな流れの中で出来あがり、五篇の詩が皆素晴らしいものでした。参加者の皆さんご苦労さまでした。閉会の言葉は森内が担当しました。尚、富田会長よりこの企画展に貴重な資料提供があり一層深みを増すことが出来ました。準備及び開催中当番に携わった会員の皆さんご苦労さまでした。この企画展を見ることなく松本昭夫さんが八月肺炎のため逝去、小林勇仁さんが九月八十五歳で逝去されました(合掌)。「詩の朗読会」「詩画展」は今年も行いますので宜しく願います。

詩の朗読

東延江「牡鹿1」、出雲章子「消えてゆく町並み」、沓澤章俊「涙色の目薬」、高野みや子「みどりの鳩」、森内伝「望郷」、山口敬子「オホーツク」、立岩恵子「大雪山」、ゲスト村田讓(詩誌「饗宴」「パンと薔薇」同人、恵庭市在住)、宮崎二三子。スピーチ土橋和子、富田正一(敬

称略)。

第二十五回詩画展出品者

東延江、出雲章子、荻野久子、杏澤章俊、小森幸子、四釜正子、高野みや子、立岩恵子、土橋和子、富田正一、森内伝、森山幸代、山口敬子(五十音順)。

旭川文学資料館・読書会について

読書会の報告

―旭川の作家(作品)を読む―

石川 郁夫

はじめに、個人的な思い出から始めようと思う。ずっと以前から感じていたのだが、旭川ゆかりの作家や作品について話をする機会がある度にその思いを強くしたのは、作品は読者に読まれることで作品になる。読者の側で言えば、作品を読むことではじめて、その作者や作品と出遭えるということだ。読むこと以上のものはない。そう思い続けてきた。

だが、残念なことに、こんなに優れた作家達が生み出した作品群が在るのに、読まれることがほとんどない。なんとかそんな場所を用意できないか。そんな時、文学資料館の協力で、陽の目を見ることになったのが、この読書会です。

昨年八月十三日の三好文夫「山に消える」からはじまって今日まで、毎月第三土曜日午後一時半に開いている。「重い神々の下僕」「ラウン

クツの女」そして二月は「獵師貝徳」。この先、さらに三好文夫を読むのか、他の作品にするのかは、決っていない。

読書会は、今のところ、石川が作品を声に出して読む。参加した人達は、資料館で準備したコピーを黙読。文字通り作品を読む読書会。読み終ったら、良かった悪かったなど、自由におしゃべりをする。話したくなければ黙っていい。いつも開かれた会だから、都合の良い時、気が向いた時、手ぶらでぶらっと出かけて来て、一緒に読んでほしい。きつと期待した以上の感動を与えてくれる作品が出迎えてくれるだろうから。参加して下さる街の人が一人でも増えてくれることを期待している。

(参加費は無料だが、コピー代を含むカンパ 三百円をいただきます。)

深谷雄大氏(当会顧問)

北海道新聞俳句賞、 地域文化功労賞を受賞

雪華俳句会主宰で当会顧問の深谷雄大氏が平成二十三年度地域文化功労賞、第二十六回北海道新聞俳句賞を受賞。同人の方より寄稿いただきました。

北海道新聞俳句賞贈呈式に参列して

雪華同人 川村 暮秋

俳誌「雪華」の深谷雄大主宰が文化庁の本年度地域文化功労賞に選ばれた。俳人として優れた作品を生み出すとともに、北北海道現代俳句

協会会長として、俳句の振興に貢献したことが高く評価された。道内から三人が選ばれたが、道北から一人である。数々の要職を努めながら、後進の指導にも力を注いでいる。

第二十六回北海道新聞俳句賞に第十四句集『六合』が満を持して受賞した。著者の俳歴は長く、十代のころからで六十年を超える。石原八束の〈血を啗いて眼玉の乾く油照〉の句に衝撃を受け、俳誌「秋」の創刊に参画。一九七八年に「雪華」を創刊、第三句集『白暝』で「雪の雄大」の評を確立する。今まで発表した雪の句はおよそ一八〇〇句。著者は「俳句は一人称の文学であり、季語は作者の現在地。雪を詠うのではなく、雪を媒介に自分を詠う」と述べている。

白暝の自伝の荒野雪が降る
今生の負に立ち向かふ雪無尽

道新俳句賞の『六合』のあとがきの一文で「俳句は、本来、自然の季語の動きの領域に人間の思想を採ってゆく文学であり、自然のいとなみの、どんな些細に見えることから目も側めてはならないと思う」と述べている。

『六合』は六方、すなわち、東西南北と天地、ひいては世界、宇宙をあらわす。という円熟の一冊である。

谷底に雪を漕ぎ来し影落す
雪の中神代に還る火を起す
花の夜虚空に月を捉へたる
夜の底に朝の見ゆる薄氷
たはれねの身を出でて影野に遊ぶ
父の世の母の世の雪みてゐたる
白といふ色のはじめの雪讃ふ
天心の月のみちびく深雪道
曳く影も仄明るしや雪月夜
冬麗の雲にしばらく時預く

六合りくがふに忘れし齡春よはひの夢
百代の過客のいめの春の雲

北海道新聞社は、本道の文学活動を高め文化発展に寄与するため、一九六七年に「北海道新聞文学賞」を制定し、毎年優秀な作品を発表した方々を表彰している。その後、短歌、俳句の創作活動が活発化し、出版される歌集、句集が相当数に達してきたため、八六年から「北海道新聞短歌賞」「北海道新聞俳句賞」を独立させてきた。第四十五回北海道新聞文学賞と第二十六回北海道新聞短歌賞、俳句賞の贈呈式が、札幌市内のホテルで行われ、参列させていただいた。村田正敏北海道新聞社社長から賞状などを受け取った深谷雄大主宰は「賞状の「情熱」という文字がうれしい。『ふりむくな ふりむくな うしろには夢がない』という寺山修司の言葉を思い出した」と感慨深げに話した。

寄贈資料の所蔵者を偲んで

いつも多くの方々から文学資料を寄贈いただいています。が、昨年ほどくに木村隆氏と益田一氏のご遺族の方から沢山の資料を寄贈いただきました。お二方のことを偲ぶ文章を紹介いたします。

木村隆先生との出会い

石山 宗晏

昭和三十七年六月のことです。

私は、旭川市立北都中学校に欠員ができたので国語・社会科の教員として着任しました。今

から五十年前のことですが当時のことは切れ切れとはいえず、誠に鮮明に思い出すことができます。

当時の北都中は、旧旭川市立北都女学校の木造校舎に三十学級余りの生徒が在籍するマンモス校でした。第二学年の副担任として配属されました。学校は、古色蒼然としておりましたが、別棟の図書館を備え、北都の杜と呼ばれた樹木に囲まれて風格のある環境を保っていました。

「君は、短歌に興味があるのですか。」

授業を終えて、教室から帰った英語教師が、私の机のそばを通る時に、こんな言葉がけをしてくれました。私は少しばかり戸惑いました。というの、教科書以外の短歌雑誌を空き時間に読みふけていた後ろめたさがあった、とっさに答えることができず、どぎまぎしたのです。着任したばかりですから仕方ありません。

これが木村隆先生との出会いでした。

卒業論文のかかわりで、「折口信夫全集」などに親しみ、古典和歌に少しばかり興味があったものの、現代歌壇の知識はまったくありませんでした。ただ折口信夫・釈空の歌には共感しており、「短歌研究」などをやみくもに読んでいたころでした。

学校の図書館は、充実したすばらしいものでした。旭川の歌人、飯田佳吉氏の寄贈した『飯田佳吉文庫』なるものもあって、宿直の日が楽しみでした。時には木村先生が、新しい短歌関係の書籍を勧めて下さったこともありました。

冬休みの直前になって、新年に開催される第三回全旭川短歌大会のことを教えて下さいました。

記録を見ますとその日時は、昭和三十八年一月二十日、ところは鉄道会館とあります。出詠

作品は五十九首もあったのですから、初体験の私はかなり緊張したことを覚えております。その折に木村先生は、「かぎろひ詩社」代表の中山勝先生を紹介して下さいました。これがきっかけとなって、私は「かぎろひ」に入会することになりました。

両先生とも、あまり口数もなく、極く手短に入会を勧めたように思います。どちらかといえ、ばその方が私の性分にあっていたのでしよう。早速原稿を提出することにしました。

木村先生と私は二度にわたり同学年所属となりましたから六年ほどの間にほんとうに親しくさせていただきました。先生との出会いがなければ、おそらく短歌などには無縁であったかもしれせん。今日、「かぎろひ」「旭川歌人クラブ」に所属していることなども含め、その縁を思うこのごろです。

益田一さんと詩誌「情緒」

東 延江

益田一さんの御遺族からこの度、たくさんの文学資料が寄贈された。戦前戦後の旭川で発行された同人誌、詩誌は勿論、昭和六年五月創刊、昭和十九年廃刊という文化月刊誌「セルパン」など旭川にとっても貴重な資料の数々であった。

小熊秀雄も書いたこの「セルパン」をみて時折資料さがして当資料室を訪れていた小熊秀雄研究の宮川達二さんが、益田資料整理のためにボランティアとして参加して下さいることになっ

た。
益田さんが取りもつてくれた心強い助っ人で資料整理の人材も更に充実されたのはうれしかぎりである。

私も同人であった詩誌「情緒」に益田さんはいつから参加していたのかと創刊号からひもといてみると、昭和二十六年五月の六号から作品からひろうと四十才前後と思うが、このあと十数年作品を発表するが、あとは長いこと沈黙を守っていた。

しかし、下村さんは同人名簿から削ることはなかった。

下村さんの残した昭和二十八年の新聞切りぬき帖の中に、「コーヒーミルを廻している益田さんの写真と詩、「平和希う心」が載っていた。仲々の男前である。

私が最後に益田さんにお会いしたのは昭和五十三年八月六日の第二回「情緒」同人会(於・花月)で、石川一遼さんが傷みどめを打ちながらの出席だった。

益田さんはぼそりと

「ちつとも詩が書けないんだよな」

という、これまたぼそりと石川さんが

「呼ばば出てくるさ、オーイ オーイってな」

と言った。二人の会話がそのあとどう続いたか覚えてないが、益田さんがうつむいて畳の目を爪でコリコリしていたのが妙に私の中に残っている。

以来七回まで開かれた同人会にはとうとう姿を見せなかった。

昔のように書きたいと思いつながら書けなかった詩、しかしやはり最後まで詩誌「情緒」の同人であり、「情緒」の詩人であった。

会員を偲んで

(亡くなられた当会会員を偲び、関係者の方々に寄稿いただきました。)

新明セツ子 昭5・10・14〜平23・8・22(1930〜2011)。札幌市生まれ。北海高女卒。昭和37年より作句し「若葉」「青女」に投句。夫紫明に手ほどきを受ける。両誌の同人として、特に「青女」の編集に尽力、内助の功を果たした。

母・新明セツ子の思い出

辰巳 奈優美

母は元来、活発で、文学を好む健康的な女性であったように思う。よく家事を熟し、同居した年寄の面倒を含めて、とにかく家族のために献身的に尽くしたと言える。特に父に対しては、父が虚弱だった所為もあって、時に過剰とも思える程世話を焼いた。

朝、父が手洗いを済ませる時間に合わせて、洗面器に熱めの湯を張り、歯磨き用の水を入れたコップを、その中心に立てる。これで洗面用の湯は適度に冷め、歯磨きの水も、歯に沁みない程度に温まる。実に細やかであった。

洗面を終えた父が食卓につくと、程よい熱さのミルクティーが用意されてある。平皿には、母が小麦粉と膨らし粉で焼いた、ふかふかのホットケーキのようなパンが一〜二切れと、茹で卵一個・チーズなどが盛られた。

概して母の料理は美味しく、本人も楽しんで作ったようだ。中でも父と兄、私が好んでリクエストしたのは、ビーフシチュー・カレーライ

ス・ちらし寿司・夜食のラーメンなどである。どれも懐かしい、家庭の味だ。

俳誌「青女」を自宅で発行するようになってからは、和室の座卓に、夫婦差し向いで、編集・校正・発送作業に追われ、作句の暇もないほど多忙を極めた。その為、睡眠不足が常態化していた。そんな仕事を四十年以上続けることができたのも、父の情熱と気力に忍耐強くついて来たからだろうが、その心労は筆舌に尽くし難い。

平成十九年十月に倒れ、集中治療室に入っても、ペンと句帳を離さない母であった。思いつくままに詠んだ句を、私が枕元で書き留めたりもしたが、脳梗塞を発症してからは、それも叶わなくなってしまった。

母はよく、父と散歩の折に、出任せの句を口ずさみ、笑い合ったりしていた。その飾らない笑顔が、時に恋しく憶われる。

家族を愛し、俳句を愛し、和服を愛した母を、心から誇りに思う。

旭川の皆様の、長い間のご厚情に対し、この場をお借りして御礼申し述べたい。

河村岳葉 昭6・9〜平23・8・13(1931〜2011)。旭川に生まれる。本名学。藤田旭山主宰の俳誌「俳海」創刊に参加。俳誌「天狼」に入会。平6年「万葉俳句会」を創立、主宰となる。平23年、句集『夫婦滝』を出版。

河村岳葉氏を偲んで

坂井 今日子

平成二十三年八月十三日、河村岳葉さんが亡くなられた。私にとってお名残り惜しく、残念

でならないお別れであった。
亡くなられる一と月程前に、岳葉さんの句集『夫婦滝』が出版された。待ちに待った句集を手になされ、その喜びを味わってから他界されたことがせめてもの慰みである。

岳葉さんは、昭和四十三年「俳海」創刊に参加、四十五年「天狼」に入会し、「俳海」「天狼」終刊の後、平成六年に「万葉俳句会」を創立して主宰となられた。その会報「万葉」は隔月刊で、平成二十二年、「万葉」百号記念特集号を出版された。その後もお元気で、去年六月に百五号を読んだ限りでは、体調が思わしくないことに気付かなかつた。

最終号となった百五号には、句集『夫婦滝』の編集にかかっていることが書かれ、「取り澄ました作品集ではなく、平明で誰にでも分かる句集をこころ掛けました」とあった。

夫婦滝すくなき水を分かちあふ

青空に手を差し入れて林檎挽ぐ

夏帽子振るたび船が遠ざかる

お花畑来世は山の花守に

独り登山やがて逝く日も一人なる

平明なことばで、耳で聞いて分かりやすくリズム感があり、しかも深い感動と詩情をたたえた岳葉さんの俳句は、四十余年間、身近に感じてきた私にとってはお手本のような俳句ばかりである。そして又岳葉さんは、俳句だけでなく、いい随筆を書かれる方であった。二十歳代から登山をされていた岳葉さんは「遠嶺」という冊子を十号まで出された。それには登山の感動と俳句、写真、身辺の随想などが納められていて、お仕事と俳句と登山を極めた豊かな人生を送ってこられたことが分かる。

今は、すばらしき伴侶であった靖子様と「夫婦滝」の句が彫られたお墓で静かに眠っておられる。享年八十一歳であった。

安保冬二 昭3・4・22〜平23・3・29 (1928〜2011)。小樽に生まれる。本名秀勝。俳誌「寒雷」「広軌」「舷燈」、文芸誌「VITA」等に所属。

安保冬二先生を偲んで

加門 サダ子

「舷燈」誌、昭和六十二年六月創刊以来、平成十九年十二月終刊まで二十年六ヶ月、後藤軒太郎主宰の右腕となり、編集長を務められた安保冬二先生。平成二十三年三月二十九日(逝去(享年八十三才))。

温厚で英国紳士の風貌の先生には意外な面があり、お酒が大好きで、お酒が入ると、古き良き時代の国内外の映画や女優俳優の名が次々飛び出し、楽しい裏話など聞かせて下さった。宝物の一つにNHKアナウンサーの加賀美幸子さんからのハガキがあると、ちよつと恥しげに誇らしげに話されていた。

居酒屋の隅の定席三鬼の忌

旅行によくご一緒させて頂いたが歴史、文学に非常に詳しく、又行動が早く、のろのろの私達を一際背の高い先生は、チラツと眼中に入れて気遣いを見せず気遣って下さっていたお姿を本当に有りがたく嬉しく思い出す。

玫瑰や渡り漁師と遊女の墓
雪やなぎ実篤旧居谷地の底

花みづき蘆花公園を犬駆ける

お子さんの句はとても多く、それ等の句から誠に愛情深い父親像が浮かぶ。

風邪の子の寝息睫毛の長さかな

たんぽぽや歩み初めし子野に放つ

高熱の子に父は木偶蟬時雨

しかし冬二先生の自分は自然詠で

流水のひしめきあひて咆哮す

引く雁の列沼に来てなだれ落つ

炎昼の水ガツキと運ばるる

等々好きな句が沢山あり迷いに迷った。

太平洋戦争中海軍兵学校に在学された先生は、静かに兵の句等も詠まれていた。

満月の枯野の続く兵の墓

句会ではあまり自己主張なさらないが、何かの折に「常にアンテナを張っていないければ。」と言われた言葉が鮮明に残っている。物静かに懐深く培っていらした冬二先生の俳句の原点、いや私達への大きなメッセージだったと。今軒太郎先生方との一献と句会を想像しつつ。

大野信夫 大13・11・14〜平23・10・17 (1924〜2011)。本名忍。昭20年8月満州で停戦、シベリアへ送られ翌年北朝鮮に移される。収容所で配給される刻みタバコをのせるのに川柳誌数項が配られ、日本に川柳誌があることを知る。そこに掲載された数篇の作品に感動、作句の原点となる。昭26年旭川川柳社入会。平9年から19年まで旭川川柳社主幹。

大野信夫氏を憶う

旭川川柳社主幹 鎌田 正勝

昨年十月十七日に逝去されました旭川川柳社前主幹大野信夫氏は、昭和二十六年「川柳あさ

ひ」の誌友になって以来、旭川川柳社を支え平成十年に主幹となり、北海道川柳界の重鎮として川柳の普及発展に努め輝かしい功績を残されております。

特に、平成二十年に旭川文団協で発行しました『旭川文芸百年史』には「旭川川柳百年史」を執筆され、また柳誌七百五十号を記念し、信夫氏の川柳歴の集大成とも言うべき『川柳あさひ課題別高点句集』を発売されるなど後世に残る業績をあげております。

旭川川柳社は昭和十一年に結成され、信夫氏は平成九年に第五代目主幹に就任。平成十九年十二月まで十年間主幹を務められ、その間新人養成のため初心者、勉強会を立ち上げるなど、後輩の育成に力を注がれて来られました。が、何しろ高齢者が多く若返りは期待通りに進みません。

平成十九年のある日ある席で、何の前触れもなく「主幹在任十年を契機として退任し、同時に『川柳あさひ』は廃刊する」と、突然言い出されて、一同はびつくり。このことで激論を交わした記憶も今は懐かしく思い出されることではありません。

高齢化が進む中、安心して任せられる後継者がいない。このまま後輩に譲ったら旭川川柳社の



看板に傷をつけられる。それ位なら旭川川柳社を道連れにしようと思われてか、「柳社」を愛する余りの思い悩んだ末の結論だったのかなと、つくづく考えているこの頃です。

お陰様で柳社の解散もなく継続されており、会員も増え若干若返って活気も出て参りまして、柳誌『川柳あさひ』も八百号に近づいて参りました。道内では古暖簾とか老舗とか言われている「旭川川柳社」の看板を傷つけることなく大野信夫氏の意志を尊重し、会員の皆さんと手を取り合いながら旭川市民に、庶民の文芸、として川柳の輪を広げて行きたいと考えております。

★館長あれこれ★

旭川文学資料館館長 富田 正一

あれは、確かに一九九七年(平成九年)夏だった。

東延江さんから「旭川の文学関係の資料(古書、写真、色紙、自筆原稿等)が揃えば、旭川の文学の歴史を解明するのに便利だと思わない」の問いに同感「それなんだよ、いいね」と応えた。後でわかったことだが年齢を考えれば、我身に降りかかって来るとは思わなかった。「富田さんは、賛成だね」話はそれっきり終わったと思っていた。

秋口になった頃、「旭川文学資料館」設立に一步一步進展しているよ。と 東さんから電話があった。「おお よかったね」と他人事のよ

うに返事をして、誰かが東さんに協力して行くのだな」と すっかり忘れていた処、一九九八年になると、市長へ提出する趣意書は尾崎さんと東さんが作成した。富田さんはこれから必要となる案件を考えておいてね。だった。出来上がった趣意書を手渡された。

「旭川文学資料館についての趣意書」

- 呼びかけ人 東 延江 岡田 雅勝
- 尾崎 道子 深谷 雄大
- 富田 正一

旭川市長 菅原 功一 殿

「昨年、三浦綾子記念文学館が開館しましたことは旭川市民としまして、大変うれしく思っております」

から始まる数項目をあげて一九九九年(平成十一年)五月二十日市役所に提出した。

その後、ボランティア会員の募集を開始。発起人に五十一名が快諾、いよいよ拍車がかかり展示するガラスケース、本棚、衝立、応接ソファ、アーセットや古書、写真等を次々と心ある方々から戴いた。会員も二百名近くになった。

文学資料館の資料も整理中のもも含めて現在約五万点余になった。

資料の収集も奥深く力を入れていきたい。

それと全国的にも珍しいNPO運営の資料館をPRし、市民の声を検討しながら市民の宝物「文学資料館」を目指すため「観覧ノート」を従来通り備え付けた。今回は紙幅の関係上二、三を紹介しよう。

※ 加藤 多一様

これほどのものだとは、知りませんでした。みんな手弁当で心と心と心とで作りました、そのみごとに、ひしひしと、わが老骸に伝

わつてくるものがあります。

※ H・B 様

市内在住ながらこんな立派な文学資料館があるとは知りませんでした。

※ 石上様・広陵中

いろいろな本や歴史があつてよかったです。

団体入館者も次々と増えてきた最近の入館者は「つくしの会」十六名、旭川東高校(定時制)百名、NHK札幌文化センター(アドバイザー)郷土史家・木原直彦氏)二十名他。

個人では神奈川県、岐阜県、横浜、東京等本州からの観覧者は10%程度、札幌、小樽、釧路、帯広、北見、名寄等道内からは25%位だった。

沖繩から来館した詩人の岸本マチ子さんは第十七回小熊秀雄賞の受賞者であり、入賞者五十三名の紹介と直筆で飾られているコーナーに「授賞後の取り扱いも丁寧で紹介されて感激した」と言う。最近の岸本氏は俳句の指導者の道も歩んでいるとか。友の会会員と懇談をして自作詩を数篇朗読されたり、沖繩の話などに花を咲かせた。また会員心づくしのランチを挟んで北と南の交流を計ってくれた。

最後に礼状の一通を紹介してこの稿を終る。

※ 信国 奈津子様・公益財団法人 日本近代文学館(東京)

札幌の木原直彦先生より「旭川に行くならば是非「貴館をお薦めいただき少しでも拝見したいと伺ったのです。充実の資料、そして全国から寄せられた同人誌なども綺麗に整理して来館者の方が手に取ってみることができるようになっていて等、本当に勉強になることばかりで慌ただしく短時間だったことが残念で悔やまれるばかりでした。」

この礼状を始め多くの言葉に甘えることなく、私たちこそまだまだ勉強して行かなければならないと思つた。

事務局より報告

【北のみらい奨励賞を受賞】

当会が北海道新聞社創設の第10回北のみらい奨励賞を受賞。平成二十三年度応募のあつた25件から4団体が選ばれた。賞の授与式が平成二十三年十月二十一日、旭川文学資料館第二展示室で行われた。

【旭川文学資料友の会創立十周年、NPO設立記念の集い】

平成二十三年八月二十八日(日)、旭川ターミナルホテル6階にて開催。旭川市副市長・表憲章氏ほか市の関係者、木野工展・講演講師の山本洋子さんから新聞記者時代の同僚、知人、そして当会会員等、計五十七名が参加。十年の足跡を振り返り今後に向けた抱負等を歓談し合った。

【企画展実施報告】

平成二十二年十月に行つた特別企画展「旭川・文学の一二〇年展」以降、当会が旭川文学資料館で行つてきた主な展示事業を報告します。

■ 「色紙、短冊、直筆原稿展(1)」

平成二十二年十一月〜十二月二十二日

来館者一四八名

■ 「教科書、ノート展・昔と今」

平成二十三年一月十一日〜四月三十日

来館者六四六名

当会会員で生活資料収集家・百井昌男氏所蔵の資料約五〇〇点を展示。江戸時代の寺子屋教本から懐かしい文房具なども。特に冬まつり期間中は多くの来館者があつた。

■ 第十四回旭川文学資料展「旭川で生まれ育つた本格的作家、新聞人・木野工展」

平成二十三年五月十日〜八月三十一日

来館者八一九名

平成二十二年秋、與子夫人から寄贈いただいた木野工資料の中から約五八〇点を展示。期間中は親族の方々や北海タイムス時代の方々等、多くの関係者が来館してくださつた。また記念講演を計四回実施。講演参加者数は延べ約百名。

・「木野工の作品を読む」

講師・石川郁夫氏(旭川在住、作家)

5/22、6/12、7/3の三回

・「新聞人として生きた木野工」

講師・山本洋子氏(旭川出身、「北海道味と旅」編集長)。8/28。

■ 「旭川俳句連盟六十年の歩み」

平成二十三年九月六日〜十月二十九日

来館者四五八名

共催・旭川俳句連盟。旭川で活動している九つの俳句結社が参加。展示点数約五八〇点。期間中三回の講演を実施。俳句連盟理事の方々に講演いただいた。講演参加者数は延べ約一二〇名。

■ 「旭川詩人クラブ三十五年の歩み・第二十五回詩画展」

平成二十三年十一月八日〜十二月十五日

来館者一八七名

共催・旭川詩人クラブ。展示点数約五八〇点。

期間中、キッズルームにて佐藤比左良さんの講話「ガリ版とともに半世紀」、詩人クラブ会員

による詩の朗読、スピーチ、参加者と共に連詩の作成などを実施。参加者数は三十四名。■「旭川冬まつり・冬の風景展」冬の俳句作品と共に〜

平成二十四年一月十日〜三月三十一日

共催・雪華俳句会、協力・NHK旭川放送局。現在開催中。百井昌男氏所蔵の資料を雪華俳句会会員の作品と共に展示紹介。オンラインブック招致の資料もあり。また雪像制作ビッググループの資料(杉本雅子さん所蔵)も展示。期間中、NHK旭川放送局所蔵の過去の旭川冬まつり映像を放映している。是非お越し下さい。



【友の会参加活動より】

・平成二十三年二月四〜六日、第二十回旭川生涯学習フェア「まなびピアあさひかわ」に参加。展示と講演を行った。

・平成二十三年十一月三日、旭川市博物館にて朗読会があり、当会会員・福田洋子さんと村田高志さんが出演。知里幸恵の遺稿ノートから朗読した。

【次年度企画展予定】

今年夏に第十五回旭川文学資料展として高野斗志美展。秋にはNHK旭川放送局と共に「なつかしの常磐公園・旭橋展」、冬には百井氏資料からの企画展を予定している。

よつこしそて★旭川文学資料館へ

(来館された方々を抜粋して紹介いたします。)

・平成二十三年二月九日(水)

朝日小学校三年生48名と引率の先生3名、日章小学校三年生12名と引率の先生1名が「教科書、ノート展」を観覧。総合学習の授業で、近くで開催中の旭川冬まつりも見に行くという。

・平成二十三年五月七日(土)

渡辺和子さんが来館。旭川生まれで父は二・二六事件で青年将校に襲撃された渡辺錠太郎。齋藤瀏の写真の前では複雑な面持ちで観覧されていた。

・平成二十三年五月十四日(土)

小熊秀雄賞贈呈式で講演予定の詩人・佐相憲一さんが小熊秀雄研究家の宮川達二さんと共に。翌十五日には第四十四回小熊賞受賞者の酒井一吉さんが小熊賞市民実行委事務局長の高田雍介さんと来館。

・平成二十三年五月十八日(水)

旭川東高校定時制生徒94名と先生6名が総合学習で観覧。

・平成二十三年六月十八日(土)

北海道教育大学旭川分校・片山晴夫先生の教室の生徒さん12名が授業で観覧。

・平成二十三年六月二十三日(木)

木野工のご長女・菰口歩さんが友人の方たちと来館。開催中の「木野工展」をご覧になり、木野工の写真やハガキを寄贈いただいた。

・平成二十三年七月九日(土)

石川啄木についての講演会の講師で来旭された近藤典彦さん(旭川出身、国際啄木学会元会長)が来館。書庫にもご案内し、村上久吉氏の著作

中の啄木についての文章を見て感心されていた。

・平成二十三年八月五日(金)

NHK札幌文化センターの教室の方々20名程。木原直彦先生が引率の文学散歩にて。小熊秀雄、今野大力の詩碑も見学された。

・平成二十三年八月十七日(水)

板東三百の甥御・中野弘也さんが来館。板東三百コーナーの展示キャプションの間違いを指摘してくださった(汗)。感謝。

・平成二十三年八月二十四日(水)

教職員互助会旭川支部つくしの会の皆様14名が来館。菅野副会長、富田館長が案内する。

・平成二十三年八月二十五日(木)

木野工の長男夫人で漫画家の大和紀さん、三浦光世さん、中西清治さんが来館。

・平成二十三年九月十六日(金)

釧路俳句連盟の方々4名。旭川俳句連盟六十年の歩み展をインターネットで知って来られた。

・平成二十三年九月二十八日(水)

第十七回小熊賞受賞者の岸本マチ子さんと俳誌「海程」所属の方々来館され、地階の交流室で手作りの昼食を共にした。

・平成二十三年十月一日(土)

日本伝統俳句協会旭川地区吟行会にて、依田明倫氏がホトトギス丘俳句会のメンバーと来館。

・平成二十三年十月十四日(金)

全国文学館協議会の会合で来旭された各文学館の方々来館。日本近代文学館の信國さん、徳永さん。有島記念館の伊藤さん。道立文学館の三井さん、森鷗外記念会会長山崎さんほか。

・平成二十三年十一月十二日(日)

閉館日だが放送大学準教授岡崎さんとNHK東京の職員十名余り。放送大学用教材として旭川文学資料館の撮影に見える。

当会会員による文学サークルの 地階交流室利用状況

第一土曜日午後一時半より「五行歌の会」。
第二土曜日午後一時半より「歌集を読む会」。
第三土曜日午後一時半より「旭川文学資料館読書会」。最終火曜日午後一時半より「わらの会」。
そのほか各文学グループの会合に使用されている。

「歌集を読む会」のこと

西勝 洋一

文字通りの会です。「読書会」という会が多
くの地域にあります。大抵は小説なり、特定
の分野の本を読んで話し合い、さまざまな感想
を交換することによって自身の固定した考え
を広げたり修正したり、あるいは他のメンバ
ーから学んだりできる機会が提供される場にな
っているようです。また、そういうもつともら
しい目的は別に、一人ではなかなか本を読む
ということが出来ないので、そのような会に入
ってれば少なくとも指定されたものは読むよ
うになり、怠惰な自分自身から脱却できそう
だ等、いろいろな思いのメンバが集まって会が
構成されているというのが一般的な「読書会」
ではないでしょうか。どちらにしても、その分
野に興味があり、前向きな人たちの集まりであ
るといえることは言えるのでしよう。「歌集を
読む会」というのはその短歌版です。歌集に限
定した読書会というのは珍しいよう、他の地域
でもあまり聞いたことがありません。

現在の会員は十五名ほど。毎月、第二土曜日
の一時半から二時間、今は旭川文学資料館の交
流室をお借りして行っています。昨年からは岩波
文庫版の『佐藤太郎歌集』をテキストにして
いますが、一冊終れば、皆さんで話し合っ
て別の歌人の作品をテキストにして読んでゆく
ということにしています。このようにして戦後
から現代に至る短歌の作品を読み続けていま
す。会費は一年間一千元。その他はあまり窮屈な
係りもなく、入退会も自由ですが、会場等
の関りもあって多くの方々をお誘いできない事情も
あります。

もう二十五年も続いているこの会は、現在は
「旭川歌人クラブ」の活動の一つになっていま
すが、もともととはごく私的な集まりでした。
発足は一九八六（昭和六十一）年の十二月。後
に旭川歌人クラブの会長になった佐藤哲彦さん
の肝いりで有志が七人ほど集まったの勉強会
でした。当時話題になった歌集を読んでみよう
ということから「歌集を読む会」と名づけられ
それが今に続いているわけです。第一回目は、岡
井隆歌集『αの星』。歌集は値段が高いので、
比較的廉価で話題性のあるもの、ということ
で全員の分を取り寄せて読んだのでしたが、今
なつては手に入りにくい貴重な一冊となりま
した。第四回目の一九八七年七月には、俵万智
歌集『サラダ記念日』を取り上げました。この
歌集が出たのが、八七年の五月でしたから、ま
だそんなに話題になっていない時でしたが、た
またま私のところにも送られてきていたのを読
んで、若い歌人の歌集ということを取り上げた
のだと思います。この歌集は今読んでも、分か
りやすさと深みを同時に持っている歌集と思
いますが、当時歌に無縁な若い世代にも受け入

れたのは、作品の魅力も然ることながら九八〇
円という買いやすい値段も一因だったように思
います。河出書房新社という大きな出版社で
なければできないことでした。現在歌集は一冊
三千円〜三千五百円。いくら「歌集を読む会」
でもそんなものはいちいち買っ居られません。
幸い、現在は文庫、新書形式になった著名な歌
集も出ていますので、そのような中から選んで
これからも読み続けることになると思います。
メンバも二十五年の間には随分変わりました。
結社に属している人もいれば、属していな
い人もいます。短歌を作らなくても、読むこと
に興味があれば会員の資格としては十分です。
いつまで続くか分かりませんが、文学資料館の
御好意に依るためにも、短歌を楽しむ輪を
広げていければと願っています。

友の会・文学資料調査事務室・近況報告

収集・提供いただいた資料本の数々

一昨年十一月から本年一月末まで、追加された資料の一部
を紹介いたします。

文学資料調査事務室 沓澤 章俊

- ・松田光春著書。『大正二年（水害と大凶作）』『上
川災害小史』『東鷹栖雑記録』ほか。
- ・小熊秀雄詩稿「プロレタリア恋愛詩集」（コピ
ー）。小熊秀雄展パンフレット。
- ・高野斗志美著書。『存在の文学』『現代文学と北
海道の家群像』『安部公房論』ほか。
- ・坂東幸太郎の画像データ。
- ・瓢子朝子歌集『星夜の花』。著者、旭川在住。
- ・酒井一吉詩集『鬼の舞』。二〇一一年第四十四

- 回小熊秀雄賞受賞詩集。
 ・『舷燈 合同句集三』。
 ・雑誌「青年評論」昭二十三(一九四八)年一月号。佐藤喜一の作品収載。
 ・詩人の色紙。河邨文一郎、入江好之、小池栄寿、藤田暎ほか。
 ・詩誌「情緒」合本。詩誌「国詩評林」。
 ・下村保太郎、江柳與二の木版画。
 ・『旭川兵村記念館 財団設立30周年記念誌』。
 ・復刻地図「昭和28年7月 旭川市街案内圖」。
 ・中島正治遺稿集『神の憐れみのうちに』。
 ・浅野清『金成マツ小伝(覚書)』(上)。
 ・『美しき街と里への旅』。木野工「石狩川」収載。
 ・中島啓幸『塩狩峠、愛と死の記録』。
 ・津田孝『宮本百合子と今野大力』。
 ・今井勝人『蚊遣り』。
 ・木野工の写真。木野工宛てハガキ。木野工が使用した万年筆。木野工長女菰口歩さんより。
 ・山東爺『北海道俳壇外史』。
 ・伊藤力『流れる日々』。著者は旭川出身。
 ・岩田道夫詩集『ミクロコスモス・ノアの動物たち』。
 ・近藤典彦『「一握の砂」の研究』。著者、旭川出身。
 ・山中弘子『えにしの糸に結ばれて』。
 ・『旭川東校新聞』昭二十九(一九五四)年十月一日付。
 ・小熊秀雄祭写真。昭五十五(一九八〇)年。
 ・河村岳葉句集『夫婦滝』。
 ・佐藤富子『はまって、もうやめられない川柳』。
 ・福居浩一『タイ文字を創れ』。木野工、下村朔朗氏についての記述あり。
 ・『むろらん港の文学館読本』。

- ・長谷川き美子遺稿歌集(復刻版)。
 ・学校文集「石ころ」一〜二十一号。昭十〜十四年(一九三五〜一九三九)。
 ・録画DVD「小熊秀雄・朗読会 第三回 春の詩」。
 ・金倉義慧『旭川・アイヌ民族の近現代史』。
 ・「なんでも通信」一〜百十四号。あさひかわ学研究会の会報。「あむ」一〜八号。
 ・戦前、戦後の映画パンフレット。
 ・齋藤史第二歌集『歴年』。
 ・岩田睦子歌集『白き野の花』。
 ・田島緑繁句集『山脈(やまなみ)』。
 ・「屯田の歴史と守護神旭山を語る集い記録集」一。
 ・くらしげまさき作詩詞集『物語を聞かせて』。
 ・俳誌「曉雲」昭五(一九三〇)年九月号。
 ・小野寺克己編『更科源藏書誌』。
 ・『国鉄北海道文学』「旭鉄文芸」創刊号。
 ・『大芭蕉全集』一〜十二巻。
 ・山村輝夫『トドマツ森のモモンガ』。絵本。
 ・「セルパン」等、戦前からの文芸誌多数。
 ・『旭川文芸百年史』。旭川文団協発行。
 ・高野斗志美関係新聞記事切り抜き。
 ・画像データ「昔の旭川」。
 ・『吉田一穂試論集』、吉田一穂・随想『桃花村』、吉田一穂『古代緑地』。真壁仁「吉田一穂論」。
 ・NHK教育テレビ録音CD「現代詩の青春」小熊秀雄。宗左近、高野斗志美出演。
 ・文芸誌「戸をたたくのは誰れ」。旭川発行。
 ・タウン誌「Da・Di・Do」。旭川発行。
 その他、旭川、道内関係の詩集、句集。旭川発行の文芸誌、詩誌、歌誌、俳誌等多数寄贈いただきました。ありがとうございました。

友の会人事動向

(かっこ内紹介者・敬称略)

【新入会員】西勝洋一。宮川達二。勝浦恭子(沢栗修二)。飯島明(菊地弘子)。寺西和子、鎌田章子、干場眞智子、白岩常子、清水紀久子、瀬川美年子、飯田ひさ子、安藤のどか、湯浅純子、伊東ミツ(西勝洋一)。浅田隆(富田正一)。長谷川光子(坂井京子)。竹内利和。煙山慶子(竹内利和)。那須敦志。野村みち子、飯田たつ子(十河宣洋)。小野寺兌子。土田桃花、本間美香(水 downstream)。鈴木千鶴子(山口敬子)。石川駿夫。古川由美子。笹川良江。

【退会者】飯沢尋子。三浦富子。佐藤富子。米田稔。中原昭彦。増澤成伊子。石田慶嗣。

【ご逝去】二〇一一年三月十日没・木村隆様。二〇一一年三月二十九日没・安保秀勝様。二〇一一年八月十三日没・河村岳葉様。二〇一一年八月二十二日没・新明セツ子様。二〇一一年八月二十六日没・松本昭夫様。二〇一一年九月七日没・小林勇仁様。二〇一一年十月十七日没・大野信夫様。

お願いとお知らせ

・ 不用な電気ポットを提供してくださる方がおられましたら連絡ください。

・ 当会会員八名が旭川市博物館主催「大人のための朗読会」に出演し、旭川ゆかりの文学作品を朗読します。是非お越し下さい。

出演日は左記。いずれも土曜日の午後三時半から一時間位。旭川市博物館展示室にて。

二月二十五日、

三月三日、三月十日、三月十七日